

第5章 福岡県農業大学校における農業教育と就農支援

橋詰 登

1. はじめに

本章では福岡県農業大学校（以下、「福岡農大」という）において実施した、養成課程に係るヒアリング調査（校長，指導教員，在校生，卒業生等）の結果と全在校生に対して実施したアンケート調査の結果に基づいた分析を行う。福岡県は言うまでもなく，我が国の主要農業地域の一つである九州の一角にあり，かつ同地域の中では最も経済的に発展した地方中核都市を抱える県である。市街地を少し離れれば田園風景の広がる農村部が展開するものの，広く通勤圏域に含まれることから総じて混住化が進展している。このため，九州の他の農業大学校に比べると入校者の非農家出身者割合が高く，平成30年度の『全国農業大学校等の概要』（全国農業大学校協議会）によれば，福岡農大の同割合は64.3%と「九州・沖縄」の平均55.0%はもとより，全国の道府県農業大学校平均60.3%をも上回っている。

こうした状況にもかかわらず，福岡農大の就農率（2018年度）は75.0%と42道府県農業大学校の中で4番目に高く，定員充足率も84.0%と8割を超えている（全国平均は79.6%）。非農家出身の生徒が増加する中で，どのような農業教育や就農支援を行い，高い就農率を確保しているのか，在校生に対するアンケート調査に加え，就農している卒業生，さらには卒業生を雇用する農業法人からのヒアリング調査によって明らかにすることが本章の課題である。

2. 大学校の概要と近年の就農状況

本節では，福岡農大の概要と近年の入校生や卒業生の状況等を，『全国農業大学校等の概要』（全国農業大学校協議会）のデータと学校長等からのヒアリング結果に基づき整理する。

（1）大学校の概要

福岡農大は，1980年に農業自営科と農業指導科を有する農業大学校として新設された。翌1981年に現在の筑紫野市吉木に移転した後，2004年に農業自営科と農業指導科を養成科に再編するとともに，研修科が新設され現在に至っている。

同校では，大学校の特徴として七つの魅力を生徒の募集パンフレットやホームページ上でアピールしている⁽¹⁾。それは，①実践主義，②多彩な講師陣，③九州唯一の総合コース，④授業料無料，⑤充実の支援体制，⑥就職に強い，⑦資格取得に有利である。それぞれの

内容をもう少し詳しく見ると、①については、校内及び隣接する福岡県農林業総合試験場での実習や1か月間の農家留学で、最先端の知識や経営技術が習得できること、②については、九州大学、久留米大学を始め、各分野で活躍している充実した外部講師陣による講義が受けられること、③については、九州（隣接する山口も含む）の農業大学校で唯一、農業技術指導者の養成を目的とした「総合コース」が設置されており、農協や農業関連企業に多数の卒業生が就職していることである。

さらに④については、受験料、入学金、授業料はすべて無料であること（教材費、海外研修費、寮費等については実費を徴収^②）、⑤については、卒業後も県内10か所にある普及指導センターから経営技術、生産技術両面からサポートを受けられること、⑥については、就農（自営就農、雇用就農）以外でも、県庁、JA、農業関連企業等、県内の農業関係の職場への就職に強いこと、⑦については、大型特殊自動車（農耕車限定）やフォークリフト等の資格が取得できること^③である。

2年課程の養成課程（福岡農大では養成科と呼称、以下「養成科」という）は、高い技術力と経営力を有する農業者や農業技術指導者を養成するための課程であり、カリキュラムの半分以上が実習に充てられ、基礎から実践を通じて技術を習得することを目的としている。2018年度での養成科の在校生数は、野菜コースが38名、花きコースが6名、果樹コースが3名、水田経営コースが10名、畜産コースが6名、総合コースが23名であり、養成科合計の在校生数は86名である。これに対し、教職員数は35人（うち、嘱託16名）である（在校生数及び教職員数は『全国農業大学校等の概要』による）。

また近年、非農家出身者や雇用就農希望者の増加等に伴って、カリキュラムの見直し等にも積極的に取り組まれており、①インターンシップを単位化、②企業による最新農機具のデモンストレーションを実施、③近隣JAと連携協定を結び実習の受け入れ環境を整備等が行われている。

なお、今回の調査対象とはしなかった1年課程の研修科では、即戦力となる地域農業の担い手を育成するため6～12か月の研修が行われている。野菜コース（施設のイチゴ、トマト、ナス等）と花きコース（施設の切花（キク）、トルコギキョウ等）があり、全体の募集定員は20名程度である。研修生は、福岡県内に居住するか県内での就農を希望する者で、県が定める認定就農者かこれに相当する者、就農して間もない者、栽培品目の転換を目指す者等を対象としている。ちなみに、研修科の修了生は全員就農している（就農率は100%）。

（2）近年の入校者及び卒業生の動向

『全国農業大学校等の概要』のデータから、福岡農大の養成科（養成課程）に係るここ5年間の入校生及び卒業生の動向を見ると（第5-1表）、2018年度の定員充足率は84.0%にやや低下しているが、5年間の平均では92.0%と高い水準にある。また、入校生に占める女性の割合と非農家出身者の割合は、ともに2018年度に急上昇しており、前者は全国平均（25.0%）に比べればまだ低いものの、前年度から12.9ポイント上昇し23.8%に、

第5-1表 福岡県農業大学校における養成科(養成課程)の入校者・卒業生の動向

(単位:人)

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	5か年平均
定 員 ①	50	50	50	50	50	50
入 校 者 総 数 ②	42	46	54	46	42	46
女 性 ③	6	10	7	5	10	8
非農家子弟 ④	17	20	26	22	27	22
卒 業 生 総 数 ⑤	41	51	33	47	44	43
自 営 就 農 ⑥	7	8	5	6	11	7
雇 用 就 農 ⑦	11	13	5	6	12	9
継 続 研 修 ⑧	5	5	0	3	3	3
他産業就職(農業一部従事) ⑨	5	12	10	12	7	9
他産業就職(農業従事なし)	11	10	10	19	10	12
そ の 他	2	3	3	1	1	2
定員充足率 ②/①	84.0%	92.0%	108.0%	92.0%	84.0%	92.0%
女性割合 ③/②	14.3%	21.7%	13.0%	10.9%	23.8%	16.5%
非農家子弟割合 ④/②	40.5%	43.5%	48.1%	47.8%	64.3%	48.7%
就 農 率 ((⑥+⑦+⑧+⑨)/⑤)	68.3%	74.5%	60.6%	57.4%	75.0%	67.6%
雇用就農率 ⑦/(⑥+⑦)	61.1%	61.9%	50.0%	50.0%	52.2%	56.0%

資料:「全国農業大学校等の概要」(全国農業大学校協議会)平成25～30年度版。

注:卒業生数は前年度末の3月での卒業者である。

後者は16.5ポイント上昇して全国平均(60.3%)を上回る64.3%になっている。

さらに同表から卒業生の動向を見ると、2018年度の就農率(継続研修及び農業にも一部従事する他産業就職者を含む)は75.0%と極めて高く(全国平均は55.3%)、この5年間の平均でも67.6%と高い水準にある。なお、雇用就農率は2018年度で52.2%と全国平均(68.8%)を下回っており、5年間の平均でも56.0%と6割に達していない。

次に、校長、教員等のヒアリング結果から、近年におけるこれら動きと、その要因について補足する。第1に、非農家出身者が急増していることについては、県内の農業高校では、農家出身者が1割、非農家出身者が9割になったと聞いており、それが今回の入校者の変化に現れたのではないか。ただし、この非農家出身者の中には、入学試験の面接で話を聞くと、実家の祖父母が農家であるケース(父母は実家を離れ、農業に全くタッチせず)も少なくなく、いわゆる「孫継承」を希望している生徒もいる。

第2に、農業高校と普通高校の卒業生割合も、ほぼ半々になってきており、農業に興味があっても経験や知識のない入校者が増え、農業教育や就農支援のあり方もこれまでと同じ方法では難しくなっている。また、養成科卒業後は、約3割の生徒が自家農業へ従事し、同じく約3割が農業法人等への雇用就農、残り約4割が農業関係の団体やメーカーに就職している。農業大学校が設置された1980年の当時、メインであった自営コースは、実家が農家であることが入学要件であった。非農家出身者でも就農への道筋があると認知され、その結果、入校生の傾向として非農家出身者が増えるのは良いことであるが、同時に大学校も変わっていかなければならない時期だと思っている。学生には、就農の動機付けや卒業後の進路・目標をはっきりと持たせてやるのが大事である。

第3に、現在、人気の高い専攻コースは、野菜コースと総合コースであり、特に農業指導者を育成する総合コースは入学倍率も高い。昨年の卒業生の中には、地域おこし協力隊

員として就業した者が1人いた。また、畜産コースについては、定員5名に対して7名の入校があり、うち6名が女性である。非農家出身者については人工授精師を目指すものが多い。

第4に、農業法人等からの求人は多く約100社にのぼる。分野としては、花きや果樹は少なく稲作や畜産経営が多い。ハローワークで求人するよりも農大生への求人を選択する傾向にあるようだ。非農家出身の学生は、在学中の2年間に栽培知識・技術を身に付け、雇用就農等の就職先も探さねばならない。しかし、社会保険制度等が整ったしっかりとした農業法人等は決して多いとは言えない。そのような状況の中、JAが新規就農者として非農家出身の卒業生を受け入れてほしいと思っている⁽⁴⁾。その第一歩として、JA筑紫、隣町のJA朝倉と、それぞれ連携協定を結び、農作業受委託を行っている公社にも関わってもらい、水田コースの学生が連携先で研修を行う等、カリキュラムの充実と就農先の確保に向けた取組を開始している。

第5に、非農家出身者の自営就農希望者に対しては、第三者継承という方法もあり、2018年度の卒業生1名がそのような形で就農する。しかし一般的には、経営資産を受け継いでしっかりとやっていくだけの資質を持った人物であるかといった個人に依存する部分でのハードルが高く、加えて引き渡す側としては、これまでに培ったものをすべて渡すことになるため、それへの抵抗等があり、第三者継承は容易ではない。

3. 在校生による大学校の評価 ―養成科在校生アンケートの結果から―

本節では、養成科の全在校生を対象に実施したアンケート調査結果から、福岡農大の教育カリキュラムや就農（就職）支援に対する在校生の評価と課題を検討する。

（1）アンケート回答者の属性

アンケートに回答があった養成科の在校生は合計82名であるが、初めに第5-2表によって回答者の属性を見る。学年別の人数は1年生と2年生が同数の各41名であり、男女比は男性が82.9%、女性が17.1%である。年齢は18歳、19歳といった未成年層が62.2%を占め、20歳の者を加えると約9割になる。21歳以上は1割程度に過ぎず、このうち30歳以上の生徒は僅か2名のみである。

また、自家の職業を見ると、専業農家が26.8%、兼業農家が15.9%、非農家が56.1%であり、非農家の中でも親族が農家でない者が40.2%と、最も高い割合を占めている。出身高校は過半を普通高校の者が占めており、農業高校や農業科のある高校の卒業生は全体の3分の1程度である。なお、専攻コースを見ると、回答者数が多い順に、野菜コース（43.9%）、総合コース（26.8%）、水田経営コース（11.0%）、畜産コース（7.3%）、花きコース（6.1%）、果樹コース（4.9%）であり、野菜コースと総合コースの生徒で全体の7割強を占めている。

第5-2表 アンケートに回答があった養成課程在校生の属性

(単位:人)

アンケート回答者数	性 別		年 齢					自 家 の 職 業			
	男 性	女 性	18歳	19歳	20歳	21歳以上	30歳以上	農 家		非 農 家	
								専 業	兼 業	親 族 に 農 家 あり	親 族 に 農 家 なし
82	68	14	17	34	22	9	2	22	13	13	33
100.0%	82.9%	17.1%	20.7%	41.5%	26.8%	11.0%	2.4%	26.8%	15.9%	15.9%	40.2%

アンケート回答者数	出 身 高 校			学 年		専 攻 コ ー ス					
	普通科卒	農 業 科 又は農業 関連科卒	そ の 他 の 科 卒	1年生	2年生	野 菜 コース	花 き コース	果 樹 コース	水田経営 コース	畜 産 コース	総 合 コース
82	43	27	11	41	41	36	5	4	9	6	22
100.0%	52.4%	32.9%	13.4%	50.0%	50.0%	43.9%	6.1%	4.9%	11.0%	7.3%	26.8%

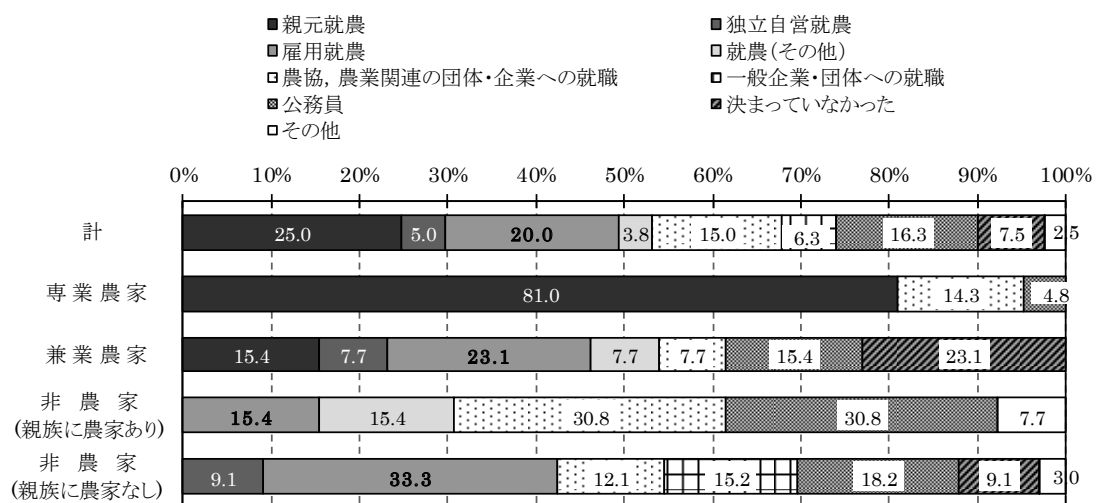
資料: 在校生アンケートより作成.

注. 「自家の職業」と「出身高校」にはそれぞれ無回答が1人存在する.

(2) 入校時の進路希望

次に、アンケート調査の集計結果から、入校時の進路希望について見る（第5-1図）。まず回答者全体を見ると、「親元就農」希望者が 25.0%と最も多く、次いで「雇用就農」が 20.0%、「公務員」が 16.3%、「農協、農業関連の団体・企業への就職」が 15.0%となっており、「独立自営就農」希望者は僅か 5.0%である。就農希望を持って入校した生徒は合計しても 53.8%にとどまっており、公務員も含め、農業関連の団体や企業への就職を希望して養成科に入った生徒も少なくない。なお、入校時に進路希望が「決まっていなかった」者は 7.5%と 1 割にも満たない。

これを自家の職業別に見ると、進路希望に大きな違いがあることが確認できる。専業農家出身者は 81.0%が「親元就農」希望であり、他は「農協、農業関連の団体・企業への就職」が 15.0%である。これに対し、同じ農家出身者でも兼業農家子弟の場合は、「親元就農」は 15.4%を占めるに過ぎず、「雇用就農」が 23.1%、「公務員」が 15.4%であり、「決



第5-1図 自家の職業別に見た入校時の希望進路

資料: 在校生アンケートより作成.

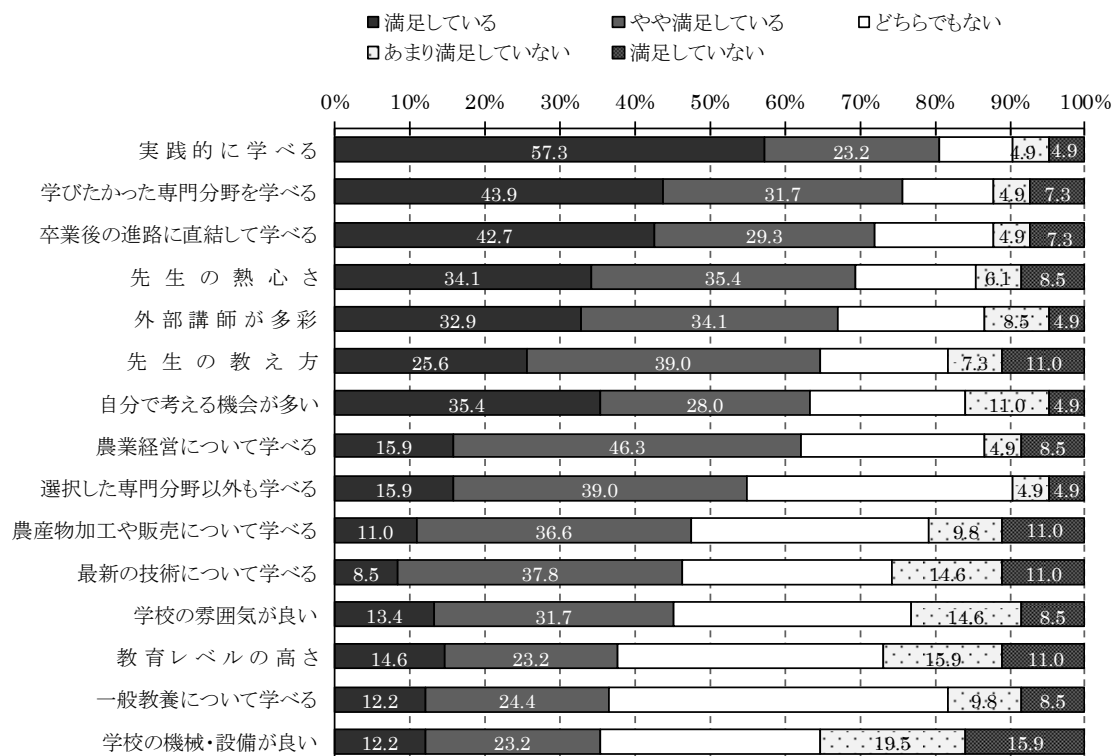
まっていなかった」とする者も 23.1%を占めている。

他方、非農家出身者は、農家出身者との違いはもとより、親族が農業に関わっているかどうかでも大きく異なっている。親族に農家がいる非農家出身者の場合は、「農協、農業関連の団体・企業への就職」と「公務員」がそれぞれ 3 割を占めている。「雇用就農」希望者の割合は 15.4%と低く、「就農（その他）^⑤」を加えた就農希望者合計でも 3 割を占めるに過ぎない。一方、親族に農家がない非農家出身者の場合は、「雇用就農」希望が 3 分の 1 を占めているが、「公務員」が 18.2%、「農協、農業関連の団体・企業への就職」が 12.1%であるほか、「一般企業・団体への就職」を希望していた者も唯一 15.2%存在する。

（３）教育カリキュラムに対する満足度

続いて、在校生の教育内容に対する満足度を第5－2図によって見た。この図は、大学校での教育内容に関連する各項目について、「満足している」から「満足していない」の 5 段階で学生の満足度を調べたものである。これによると、「実践的に学べる」「学びたかった専門分野を学べる」「卒業後の進路に直結して学べる」の 3 項目が、満足しているとやや満足しているを合計した割合が 7 割を超えている。この中でも特に、「実践的に学べる」は「満足している」と回答した生徒が 57.3%と過半を占め、他の項目に比べ突出している。

さらに、これら項目に次いで満足度が高いのは、「先生の熱心さ」「外部講師が多彩」「先生の教え方」「自分で考える機会が多い」「農業経営について学べる」「選択した専門分野以外



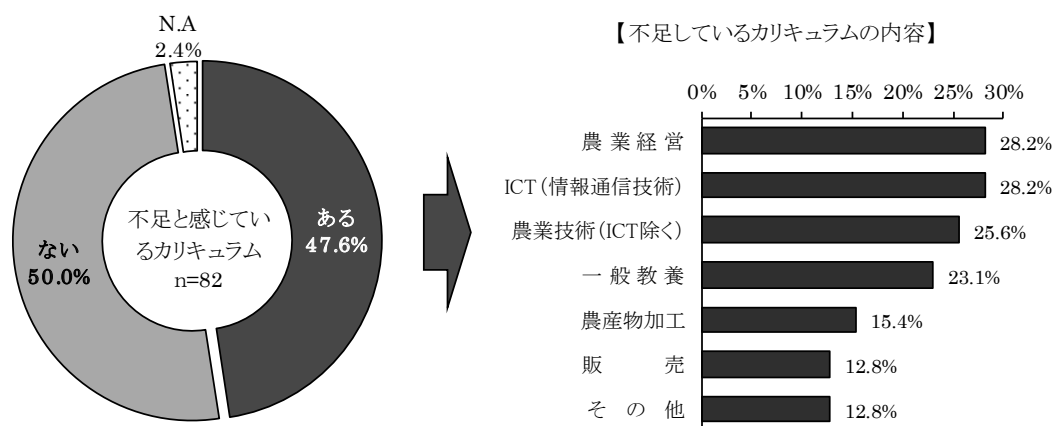
第5－2図 大学校における教育内容の満足度

資料：在校生アンケートより作成。

外も学べる」であり、これら項目では満足しているとやや満足しているの合計割合がいずれも 5 割を超えている。

一方、「学校の機械・設備が良い」「教育レベルの高さ」「最新の技術について学べる」等では、「満足している」とする割合が 1 割程度（やや満足しているを加えても 4 割程度）であり、あまり満足していないと満足していないの合計が 2～3 割程度ある。なお、満足していないの割合が最も高かった項目は、「学校の機械・設備が良い」の 15.9%であり、老朽化した機械や施設の改善を望む声が反映されている。とはいえ、在校生による大学校の教育内容に対する評価は、総じて高いと見てよいだろう。

次に、大学校で不足しているカリキュラムがあるかどうかを尋ねた設問では、「ある」と回答した生徒が 47.6%とほぼ半数であった（第5－3図）。この「ある」との回答した者に不足しているカリキュラムの内容を尋ねたところ、「農業経営」と「ICT(情報通信技術)」がともに 28.2%、「農業技術（ICT 除く）」が 25.6%であり、ICT を含む農業技術取得や農業経営といった、就農現場で実践的に役立つカリキュラムを求める声が多かった。なお、「一般教養」を望む声が 23.1%と比較的高い割合となっている点も注目される。



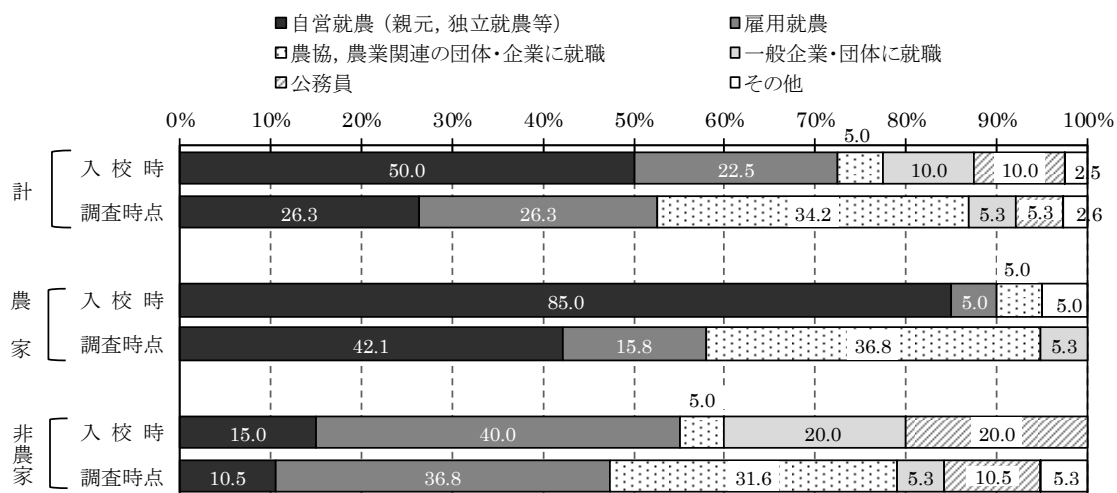
第5－3図 大学校の教育で不足していると感じるカリキュラム

資料: 在校生アンケートより作成。

（４）進路希望の変化と進路指導

第5－4図は、入校時の進路希望と調査時点での卒業後の進路希望を農家出身者、非農家出身者別に比較したものである。なお、ここでは調査時点での卒業進路がほぼ確定している 2 年生のみを対象とした。この図を見ると、農家出身者の場合、入校時は「自営就農」（そのほとんどは親元就農）希望が 85.0%であったのが、調査時点では 42.1%へと半減している。減少した分は「農協、農業関連の団体・企業に就職」に変わっており、入校時の 5.0%から調査時点では 36.8%へと大幅に上昇している。

一方、非農家出身者の場合は、「自営就農者」希望が入校時の 15.0%から 10.5%へと 4.5 ポイント、「雇用就農」希望が同 40.0%から 36.8%へと 3.2 ポイント低下しており、両



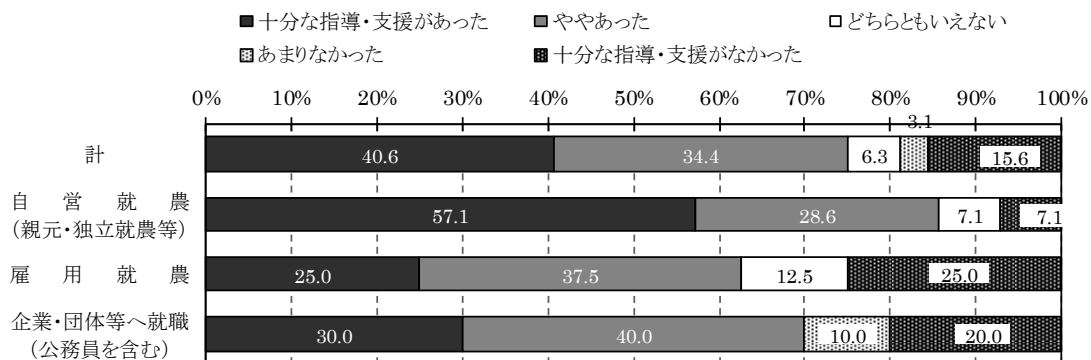
第5-4図 自家の職業別に見た進路希望の変化（2年生のみ）

資料: 在校生アンケートより作成。

注: 調査時点の「就農(その他)」には、就農に向けた研修継続を含む。

者を合計した就農希望者の割合は 55.0%から 47.3%へと低下している。このほか「一般企業・団体に就職」や「公務員」を希望する生徒も、それぞれ 14.7 ポイント、4.5 ポイント低下している。これに対し「農協、農業関連の団体・企業に就職」希望者のみが 5.0%から 31.6%へと大きく上昇しており、入校当時、進路を決めかねていた者（「その他」に該当）も含め、JA 等の農業団体や農業機械メーカー等の農業関連企業への就職へと進路希望が変化している様子が確認できる。

さらに、2 年生のみを対象に、大学校による進路指導の満足度を見ると（第5-5図）、入校時の進路希望によって大きな違いがある。まず、2 年生全体について見ると、「十分な指導・支援があった」とする生徒割合が 40.6%と最も高く、「ややあった」の 34.4%を加えると、7 割以上の生徒が進路指導に対して肯定的な評価を行っている。「十分な指導・支援がなかった」や「あまりなかった」と回答した生徒の割合は、それぞれ 15.6%、3.1%と低い。



第5-5図 入校時の進路希望別に見た進路指導の実施状況（2年生のみ）

資料: 在校生アンケートより作成。

これに対し、自営就農希望であった生徒は、過半の 57.1%が「十分な指導・支援があった」と高く評価しており、「ややあった」を加えると 9 割近くになる。「十分な指導・支援がなかった」とする者の割合は 7.1%と極めて低い（「あまりなかった」は該当者なし）。一方、入校時に雇用就農を希望していた生徒は、「十分な指導・支援があった」と回答した割合が 25.0%と低く、「ややあった」を加えても 6 割強にとどまる。「十分な指導・支援がなかった」と回答した生徒の割合が 25.0%と高く、自営就農希望者と明確な違いがある。このほか、企業・団体等への就職を希望（公務員を含む）していた生徒も、おおむね雇用就農希望者と同じ傾向にあり、「十分な指導・支援がなかった」と「あまりなかった」の合計割合が 30.0%を占めている。

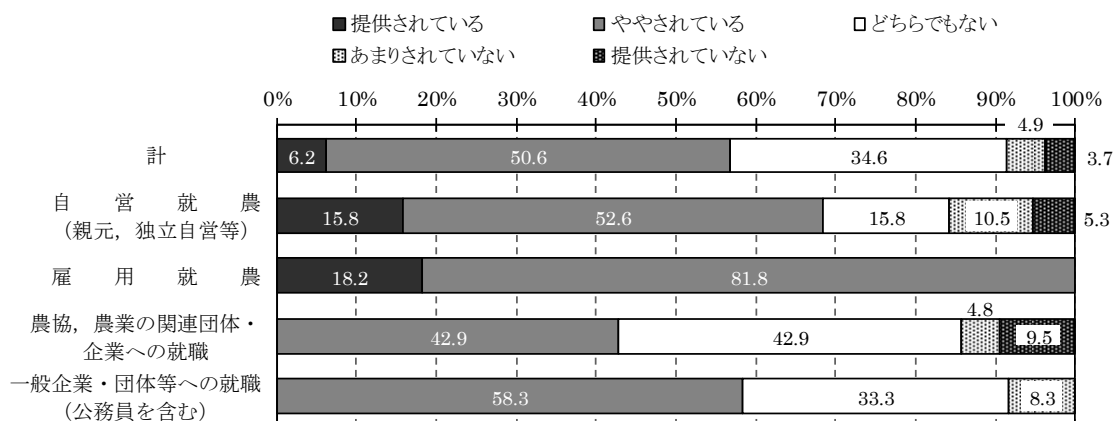
このように、大学校の進路指導に対する生徒の評価も総じて高く、特に、自営就農者希望者からの評価が高い。一方、雇用就農や企業・団体等への就職を希望する生徒の中には、十分な進路指導や支援がなかったという声も少なからず存在しており、改善の余地が残されている。

（５）環境変化に対応した教育の提供

在校生アンケート分析の最後に、農業の変化に対応した教育内容が提供されているかどうかを進路希望別に見た（第5－6図）。ここでの進路希望は、入校時点ではなく、調査時点の希望とし、1年生を含む全生徒を対象とした。

まず在校生全体で見ると、「提供されている」が 6.2%、「ややされている」が 50.6%、「どちらでもない」が 34.6%、「あまりされていない」が 4.9%、「提供されていない」が 3.7%という割合になっており、多くの学生が農業の変化に対応した教育内容が提供されていると回答している。

これを進路希望別に見ると、自営就農希望者は 15.8%が「提供されている」と回答しており、「ややされている」の 52.6%を加えると、約 7 割が変化に対応した教育内容がおお



第5－6図 卒業後の希望進路別に見た農業の変化に対応した教育の提供

資料: 在校生アンケートより作成。

注. 自営就農には、就農に向けた研修を含む。

むね提供されているとしている。これに対し、雇用就農希望者は「提供されている」が18.2%で、残りはすべて「ややされている」と回答している。

一方、農協、農業の関連団体・企業への就職希望者や一般企業・団体への就職希望者（公務員を含む）は、「提供されている」と回答した生徒がともに該当せず、「ややされている」がそれぞれ42.9%、58.3%と多数を占めている。これら希望者は、「どちらでもない」と回答した割合もそれぞれ42.9%、33.3%と高いといった特徴がある。

このように、就農希望者の多くが農業の変化に対応した教育内容が提供されていると評価しているのに対し、就農ではなく就職を希望する生徒からの評価は、就農希望者に比べやや低くなっている。

（６）卒業を控えた在校生の事例

福岡農大では、卒業を間近に控えた在校生２名から、ヒアリングの機会を得た。本節の最後に、その概要も簡単に整理しておこう。

一人は、水田経営コースの２年生であるＡ氏（20歳、男性）で、農業高校出身の兼業農家の子弟である。実家では祖父が米を1.1ha作っているが、同居の両親は収穫や田植の手伝いをする程度で、それ以上はタッチしていない。

Ａ氏は、小さい頃から農業が好きだったこともあり農業高校に進学し、高校卒業後の進路として、実践的に学べる福岡農大を先生に勧められて養成科に入校した。大学卒業後は、町内のイチゴ農家で２～３年研修をし、その後自営就農する予定である。当初は水田経営で生計を立てようと思っていたとのことだが、実際に就農してすぐ農地を集めるのは難しいことから当面は複合経営を目指すとしており、専攻コースとは異なるイチゴを選択し、研修を行う予定である。なお、研修は社員という形でやる予定であるが、給与面はまだ決まっていないとのことだった。

福岡農大で学んで良かったことについては、実践的に学習できたことや農業高校よりも深く学べたことを挙げている。その上で、非農家の子弟でかつ普通高校の卒業生が大学校に入ると、農業高校で学ぶべき基本的な知識がないので入学当初は大変であることとしている。また、寮に入り寮生たちと農業の話をできたことはプラスだったとしつつも、寮が古く、修繕等が十分ではなく、改善してもらいたかったとの意見も聞いた。

Ａ氏は卒業後すぐに就農できるかどうか分からなかったため、農業次世代人材投資資金（準備型）は利用していない。福岡農大の養成科は学費等が無料のためもらっていない人が多い（研修科の生徒で、卒業後すぐに就農する人はもらっている）。３～４年後にハウスを建てる予定があるので、確実に始めるとなったら検討したいとのことだった。なおこれとは別に、町が新規就農者に対して就農時の資金を半額補助しているので、これを利用し、残りは10～15年かけてローンで返す予定とのことである。

営農計画は、親戚のイチゴ農家に聞きながら立てたとのことである。１年生の終わりに経営計画論という授業があったが、地区での研修が終了し、実際の営農計画を立てる段階で学べたら良かったとのことだった。このほか、福岡農大には就農後の情報交換を図るた

めに、OB や OG の交流会、同窓会を行ってほしいという要望も出された。

もう一人は、総合コースの 2 年生である B 氏（20 歳、女性）で、農業高校出身の非農家の子弟である。ただし、母方の祖父が規模は小さいが今でも自給用の米と野菜を作っている。両親は農業には全く関心がない。B 氏は、高校時代から放課後や休日に祖父の農業を少し手伝っていたとのことである。

B 氏が農業高校を選択したのは、農業に関係する仕事がしたい（祖父の農業を引く継ぐことも含め）と思ったからである。高校卒業後、福岡農大の養成科に入学したのは、学費も安く（授業料は無料、教材費のみの負担）、就職に有利だと考えたからであり、県の普及員になりたいと思い大学校では農業指導者を育成する総合コースを選択している。総合コースの 2 年生は現在 10 名で、うち女性は 2 名、4 名が非農家出身者である。

B 氏は、1 年目に野菜栽培を中心に学び、2 年目は県の農林業総合試験場（大学校に隣接）の研究員と一緒に土壌に関する研究を行っている。福岡農大では実践的に学べたことに加え、選択した専門分野以外のことも学べたので満足していると回答している。卒業後の進路を含め先生方には熱心に指導してもらったとのことだった。

4 月からの就職が内定している JA は第 1 希望ではなかったが（第 1 希望は県の普及職だったが、これはかなわなかった）、無事就職できて良かったと思っている。どこの支店になるか、またどの部署で働くのかはまだ決まっていないが、できれば営農指導に携わりたいとの希望を持っている。

福岡農大での 2 年間は、いろいろな行事を通じて多くの人とコミュニケーションを図る力が養われたと感じている。また、県の試験場の研究員と一緒に仕事できたことは、今後の仕事に大変役立つとのことだった。

4. 卒業生の動向と大学校の評価

本節では、既に就農している 4 人の卒業生（親元就農者と独立自営就農者が各 1 名、雇用就農者が 2 名）のヒアリング調査結果から、卒業後に就農して現在に至るまでの経緯や大学校への評価について整理する。

（1）自営就農した卒業生の事例

1）親元就農した C 氏

福岡農大の養成科を 2013 年に卒業し、親元就農した C 氏は、現在 24 歳である（第 5-3 表）。C 氏は、公立高校の普通科を卒業した後、すぐに自家農業に従事するつもりだったが、父から「農業大学校でしっかりと勉強してから就農した方がよい」と進学を勧められ養成科に入っている。野菜コースを専攻したのはアスパラガスの勉強がしたかったからである。就農後、1、2 年、パプリカの栽培を行っていたが、管理に手が回らないので今はやっていないとのことだった。3 年早く就農した兄も福岡農大の卒業生（総合コース）である。

第5－3表 卒業生(自営就農者)の経営概況と大学校の評価

氏名(就農形態)		C (親元就農)	D (独立自営就農)
性別・年齢		男性・24歳	男性・37歳
卒業年・専攻		2013年・野菜コース	2013年・野菜コース
実家の職業 入校前の状況		農家(父はサラリーマン→帰農) 高校(普通科)卒	非農家(父は造園業) 四大卒→東京で就職(7年)→Uターン
農業 経営 の概 況	経営部門	稲作14ha, アスパラ25a, スーパー等での直売, 作業受託(親の経営に参加)	アスパラ 34a, イチゴ 20a, イチジク 10a+直売 +観光農園(イチゴ)
	売上金額	3,000万円(うち、アスパラが半分)	2,600万円程度
	農業労働力	父, 祖父, 兄, 兄嫁(一部), 本人, 臨雇3～4名(育苗)	本人, 妻, 常雇3名(卒業生), 通年パート2名, 臨雇3名
	今後の方針	面積拡大(稲作), 法人化	面積拡大, イチゴへの切替え, 加工品の開発
大学校に入学した理由		・高卒後, 即就農予定だったが, 父から農業大学校進学を薦められた ・兄も農大卒業生(就農済)	・当初から独立自営就農希望, 研修科も紹介されたが1年間で勉強しながら農地を確保するのは難しいと考え養成課程に入学 ・早く自立したかったので野菜科を選択
大学校の 評価	学べてよかった点	・農業の基礎的知識・技術を学べた ・生産技術を学べた ・大特免許等資格が取れた	・農業の基礎的知識・動作を学べた ・農業に関することを幅広く学べた ・同期や先輩との交友関係ができた
	学び足りなかった点	・農業経営学 ・効率的な機械の運用方法	・社会人としてのマナー
	就農支援	どちらともいえない(親元への就農が決まっていたので特に就農支援なし)	十分だった(地域の農業に関することやコミュニティについて教えてくれた)
	学び直しの必要性	ある(財務管理, 法人化に必要な手続き等)	ある(農業経営学, 労務管理等)
青年農業者 給付金の受給		利用していない(親と同部門のため)	準備型を利用, 卒業後に経営開始型を受給
その他 (要望等)		設備資金への助成, 農地あっせんの仕組みが必要	・いくつかの普及所を回ったが, 知らない人への農地の貸付は難しいと言われた ・町の就農支援体制が充実していたので就農を決意, アスパラを第三者継承(来年返還)

資料:ヒアリング調査から作成。

現在は、祖父母、父母、兄一家(兄嫁と子供)と4世代同居しているが、家を出る予定で現在購入した家をリフォーム中である。なお、兄弟は他に、姉と弟がおり、2人とも他出している。

家の農業は元々祖父母が行っていたが、父が40歳の時に会社を辞めて専業従事するようになり、それから7年たって兄が福岡農大を卒業し就農、2014年にC氏も就農している。現在の経営概要は、水田面積14ha(借地が約8割)で、水稻8ha、大豆6ha弱(水利の悪い圃場)、裏作に麦(14ha)の栽培とアスパラガスのハウス栽培(13棟)を行っている。労働力は、父、兄、C氏が農業専従、兄の妻と祖父母は手伝い程度である。母は常勤で働いている。

アスパラガスは父が専業従事した後、2006年から開始した作物であり、C氏が就農した時にハウスを更に2棟増やしている。作業は祖父母に手伝ってもらっているが、雇用は導入していない。C氏によれば、今の規模(13棟)が家族労働力でまかなえる最大の規模であり、これ以上増やすと水田作業に手が回らなくなってしまうとのことである。地域の農

家からは「田んぼを借りてくれ」という依頼が多く、できるだけ受け入れるようにしているが、アスパラガスの作業等もあり、大豆については草が伸び放題で管理の手が行き届いていないのが現状である。

経営内での役割分担は、父が営農計画を立てて経営判断を一元的に行い、兄は機械作業が中心、C氏は機械作業の他に取引先への配達を行っている。C氏の月収は13万円（兄は17万円）であり、売り上げが伸びればそれが反映される。ボーナスは年に2回ある。

生産物の多くはAコープ等と直接取引をしている。販売先はすべて父が開拓したものであり、米はすべて直売、麦・大豆は直売のほか一部をJAに出荷、黒大豆は生産組合へ出荷している。今後の経営については、水田面積を拡大し、ゆくゆくは法人化を図り、雇用を導入し兄弟で共同経営を行いたいと考えている。

福岡農大での学習については、基礎的な栽培知識や生産技術を学べたこと、大特免許が取得できたのが良かったとする一方で、トラクターでの田の耕耘方法や簿記等の経理の知識をもっと学びたかったと回答している。C氏は今でも、経理の知識や法人化するに当たって何が必要なのかを学びたいと思っており、短期講習会等があれば参加したいとの意向がある。農業は実際にやってみないと分からないことが多く、どちらかと言えば講義（座学）より実習を増やした方が良いという意見であった。また、スマート農業に関しては、自分達の経営に情報機器等を導入してはいないが、ドローンを自分で操作して農薬散布等を行っている。ラジコンヘリは免許が必要だが、ドローンは届け出だけで免許が不要なので取り組みやすかったとのことである。

大学校からの就農支援は、親元就農だったので特になかったようである。農業次世代人材投資資金については、受給条件が親の経営と分離することであり、そのためには農地の利用権を変更しなければならなかったことから利用していない。

2) 独立自営就農したD氏

養成科の野菜コースを2013年に卒業し、県内のO町で独立自営就農したD氏は、現在37歳である（前掲第5-3表）。地元の高校（普通科）を卒業後、東京の農業系の四年制大学で流通・経済学を学んでいる。大学を卒業してからは東京で7年間サラリーマン生活をしてしたが、農業を自分でやりたくて地元に戻り、福岡農大に入学したとのことである。実家は非農家であり、父は造園業を行っている。大学校は実家から少し離れているため2年間寮生活をおくっている。

D氏が養成科の野菜コースを選択したのは、早く自立した経営を確立するためには、野菜生産がベストだと考えたからであり、研修科も紹介されたが、1年間で勉強しながら農地等を確保するのは難しいと判断し、2年課程の養成科への入学を選択している。

独立就農して5年目となる現在のD氏の経営は、畑を64a借地し、イチゴ20a、アスパラ34a、イチジク10aを栽培している。地代はイチゴが年間50万円（施設は個人有）、アスパラは第三者継承で施設込み年間130万円（5年契約）、イチジクは年間30万円である。もうすぐ契約が切れるアスパラ施設（第三者継承）は持ち主に返却し、イチゴを拡大する

意向である。イチゴは、隣接する道の駅で直売できるので、面積拡大と併せ加工部門にも取り組む（加工品も道の駅で販売）ことを考えている。

ところで、D氏は独立就農するに当たって農地が必要だったことから、在学中に各普及センターを回って農地を求めているが、知らない人には貸せないと何度も断られている。そこで新規就農者への支援体制が充実していたO町で、第三者継承によるアスパラの経営を開始したとのことである。イチゴの生産を開始したのは3年目からであり、栽培に詳しい福岡農大の卒業生（後輩）を雇用して技術不足を補うとともに、農業次世代人材投資資金等を活用して施設を整備し、以降少しずつ経営規模の拡大を図ってきている。現在の農業労働力は、D氏と妻が農業専従、常時雇用者が3名（いずれも福岡農大の卒業生）と通年パートが2名である。このほかにも、作業のピーク時には3名を臨時雇用している。来年4月には法人化する計画であり、将来的には、常時雇用だけで経営を回せるようにしたいと考えている。在校生（1年生）を1名、卒業後に採用する予定でいる。

D氏が福岡農大に入学したのは、専門分野を深く学べること、実践的に学べることが理由だったが、大学校での教育内容は就農するのに大変役に立ったとしている。具体的には、農業の基礎的知識・動作が身についたこと、農業に関することを幅広く学べたこと等を挙げている、このほかにも、同期や先輩・後輩との交友関係ができたことが大きかったとしている。大学校は、若手の農業者とのつながりをもつ貴重な場と捉えており、積極的に卒業生に採用募集をかけている。採用に当たっては、農業技術だけではなく、一般社会人としての素養やコミュニケーション能力を重視しているとのことである。そのため、大学校の教育の中で、社会人となった時に必要な最低限のマナー等を身につけてほしいと後輩達に期待を寄せている。

D氏は若い人をどんどん採用して人材育成（栽培技術はまかせる）を図り、30～40歳で自立（分社化も可）してもらうのがベストと考えており、これによって人材の循環が図られるとしている。そもそも20歳代前半で独立自営就農するのは難しく（特に非農家子弟の場合）、とりあえず農業法人で一旦働く方が無理ないとのことだが、農地のあっせんや第三者継承のマッチングに対する支援の充実も必要であると考えている。

（2）雇用就農した卒業生の事例

1）G法人に就農したE氏

E氏は、養成科の水田経営コースを2017年度に卒業し、県内のG法人に就職（雇用就農）した現在21歳の女性である（第5-4表）。地元の農業高校を卒業後、福岡農大の養成科に入学し、水田経営コースを専攻している。福岡農大を選択したのは、実践的に学べ、寮があり、学費が安かったからであり、水田経営コースを選んだのは、入校当初、祖母が県内のI市で小規模ながら稲作を行っていたため、それを継ごうと思ったからである。

現在の農業法人に就職（就農）することを決めたのは、大学校での会社説明会で社長の話（法人で農産物の生産を行えること、設立されたばかりの法人でありスタートアップに立ち会えること等）を聞いて魅力的だと感じたからである。大学校で研修を実施した際（別

第5-4表 卒業生(雇用就農者)の就農状況と大学校の評価

氏名(就職先)		E (G 法人)	F (H 法人)
自家の職業 性別・年齢 卒業年度 入校前の状況 専攻(法人での担当)		非農家(祖母が稲作) 女性・21歳 2017年度 農業高校卒 水田経営コース(野菜)	非農家(祖父が稲作) 男性・25歳 2017年度 大学中退→1年農家研修 畜産コース(養鶏)
大学校に入学した理由		・入校当初は祖母が稲作を行っていたので、継ぎようと思っていた ・大学校を選択したのは実践的に学べ、寮があり、学費が安いから	・自分のしたいことは動物の世話をする仕事ではないかと考え、1年間酪農家で研修、その後、農業を職業にすることを決め、大学校に入学
大学校の評価	学べてよかった点	・農業の基礎的知識～専門分野を学べた ・体力的・精神的向上	・研修制度 ・基礎的な知識や技術の取得 ・教員とのつながり
	学び足りなかった点	・特になし	・コミュニケーション力を身につける場が必要
	就農支援	・十分だった	・十分だった (他の会社候補についても大学校の先生が調べてくれた)
雇用就農にあたって	就職ルート	農業大学校への説明会	農業大学校への求人
	独立自営就農を考えたか	・考えていない (卒業後に祖母の経営をすぐに継ぎようとは思っておらず、お金もなかったので雇用就農を選択)	・考えていない (他の会社や県の採用試験も受けたが、先生のすすめや社長の熱意もあり、現在の会社に就職)
	農業法人への就職当たって重視した点	・スキルアップできる ・経営主の考え方に共感 ・学んできたことが生かせる	・福利厚生充実 ・事業内容(畜産) ・経営主の考え方に共感
	今後のキャリアパス	・作りたい作物を作れることになったので、カボチャを作る予定(将来的には鶏の飼育も)	・現場でより養鶏・経営の知識を身につけて職場でのスキルアップを図る
	就職先として決めた理由	・法人で農産物生産ができる ・自由にやらせてくれる(人に指示されるのは合わない) ・会社のスタートアップ社員になれる	・社長の熱意 ・農大の先生のすすめ
今後の学び直しの必要性について		ある(基礎的な農業技術、効率的な生産方法)	ある(養鶏の知識、農業経営学など)

資料:ヒアリング調査から作成。

の法人)、上からの指示で働くのは終わりが見えなくて苦痛だったので、この法人が自分に合っていると思ったとのことだった。また給料も良かった。祖母の農業を卒業後にすぐに継ぐには、資金がなかったこともあり断念したが、いつかはI市の地域ブランドを生かして米を作りたいという意向を持っている(今の法人がやってくれるならそれでもよいとのことだった)。

E氏は、法人で野菜の生産部門を担当しているが、新たに自分で作物を自由に作れることになったので、カボチャを作ってみたいとのことだった。また将来的には、自分のブランドを作りたいという夢を持っており、その候補として、農業高校の時に畜産をやっていたので、米をえさに鶏を飼養し、白いたまごを生産してみたいとのことだった。

また、福岡農大での教育で現在役に立っているのは、農業の基礎的知識・動作が身についたこと、農業に関することを幅広く学べたことに加え、体力・精神力が身についたこと等を挙げている。今後の学び直しの必要性については、基礎的な農業技術のほかに、野菜の効率的な生産方法やそれぞれの野菜に適した栽培技術を勉強する必要性を感じていると

のことだったが、その理由は、大学校で野菜生産の基本については勉強したが、会社に取り組んでいる野菜の中では、ベビーリーフくらいしかやったことがなかったためである。

なお、非農家出身者や雇用就農を目指す学生に対するアドバイスとしては、農業の現実（生産は相当きつい）をもっと見た方がよいとのことだった。大学校においても、自分で農業をやるならば、自分で考えられるようになる教育を行ってほしいとのことだった。

2) H法人に就農したF氏

養成科の畜産コースを2017年度に卒業し、H法人に就職（雇用就農）したF氏は、現在25歳（男性）である（前掲第5-4表）。実家は非農家であるが、子供の頃に、祖父が米づくりを行っていたという。地元の普通高校を卒業し、小さい頃からの目標であった小学校の先生になるため、大学は教育学部に進学したが、3年生になって就職活動を始める時期を迎えた時に、自分が本当に希望する進路は、農業等動物の世話をする仕事ではなのかと思い直し、休学して1年間、乳牛を飼育する畜産農家で研修を行っている。

その後、農業を職業にすることを決め、そのために必要な農業の知識・技術を学べる教育機関を調べる中で福岡農大を見つけている。大学校では養成科の畜産コースに入り、入校後1か月間、各畜種を飼育する様子等を見た上で、鶏を専攻することを決めている。

F氏は、卒業後の就職先を検討する際、今の法人の他にも、他の会社（農業法人）や県の家畜改良センターの採用試験も受けている。他の会社と迷っていたが、大学校の先生にもいろいろ調べてもらい、各法人の事業や経営内容等について自分にも分かるように説明をしてもらった。最終的には、先生の薦めと社長の熱意により、今のH法人への就職を決めている。今の法人では、養鶏場での生産活動のほか、隣接する店舗（卵の直売と生産した卵を使用した菓子等を販売）での接客対応や事務も行っており、多いときで1日に約3万円の売上があるとのことだった。

福岡農大でのカリキュラムの中で、一番自分の糧になったのは、実際の農業経営で1か月間研修を行う「農家留学研修」であったと答えている。養鶏を行う農業法人で研修を行い、はじめから1万羽の飼育を任されたという。すべての鶏を見回すのだけでも大変で、あまりの忙しさに過労死するのではないかと思ったほどだったそうである。だが、今から思えば在学中にもっとこのような（現場で苦勞をする）経験があってもよかったと回顧している。このほか、基礎的な知識・技術を学ぶことができたので、就農した後の実際の作業に入っていきやすかったことや、大学校の教員とのつながりができたことは、自分にとって大きなメリットだったとしている。

なお、非農家出身者や雇用就農を目指す後輩の学生に対して大学校の教育で必要だと思うことは、社会人としての基礎知識と能力であると答えている。F氏の事業所では明確な役割分担が決まっておらず、その時々に対応できる人が対応する方法を取っていることや、外部の業者の方がやってきて話をするが多いため、社会人としてのマナーやコミュニケーション力の必要性を日頃から感じていることがその背景にある。

5. 卒業生を雇用する農業法人の評価

本節では、卒業生を雇用している農業法人のヒアリング調査結果から、農大生や大学校への評価を明らかにする。調査した農業法人は、前述した雇用就農した卒業生が就職した二つの株式会社である（第5－5表）。

第5－5表 養成課程卒業生を雇用している農業法人における大学校の評価

法人名		(株) G	(株) H
農業法人の概要	設立年・資本金	2017年・200万円	2010年・1億円
	取り組む事業	農産物生産、直売	農産物生産、直売
	経営耕地面積	80a	27ha(うち養鶏1ha)
	取り組む作物	レストラン向け葉物洋野菜等	野菜、果樹、養鶏
雇用条件等	売上金額	目標1,000万円	生産部門約5億円
	従業員数(正社員)	3名(2名)	218名(38名)
	うち、農大卒業生	2名	13名
	正社員採用頻度(採用したい人材)	2～3年に1名 (現場管理責任者、圃場等作業者)	ほぼ毎年3名程度 (現場管理責任者、圃場等作業者)
雇用条件等	初任給	18万円	15万円
	昇級・賞与	共にあり	共にあり
雇用条件等	休日	日、祝、隔週で1日休み、有給年9日	年間96日、有給年11日
	福利厚生	雇用、労災、健康、厚生、住居、扶養、時間外手当、退職金、産休・育休	雇用、労災、健康、厚生、通勤手当、住居手当、扶養手当、時間外手当、退職金、産休・育休
農大生採用のために行っていること		・大学校への求人票提出 ・出前授業 ・インターンシップ、研修の受け入れ ・OB・OGによる後輩への接触	・大学校への求人票提出
農業大学校・農大生の評価	農大生に求める能力	・農業の基礎的知識・技術 ・専門分野の深い知識・技術 ・精神力	・農業の基礎的知識・技術 ・経営に関する知識 ・体力
	正社員採用時に重視する点	・専門性の高さ ・人柄 ・現場監督能力	・体力 ・意欲・熱意 ・コミュニケーション能力
	農大生に不足する能力	・農業の基礎的知識の強化(応用が利くようにしてほしい)	・一般教養
	求めるキャリア	・各生産部門のリーダー ・会社幹部 ・分社化	・農場長 ・会社幹部 ・業務拡大担当者
	今後、大学校に求めること	・社会人基礎力の強化 ・農業法人社員向け研修機会の提供	・農業技術面の強化 ・経営学の強化 ・社会人基礎力の強化

資料:ヒアリング調査から作成。

(1) 株式会社 G

(株) G は前節の雇用就農者 E 氏が就職した法人であり、設立は 2017 年とまだ新しい農業法人である。圃場は A 市にあり 80a 借地し、3 分の 2 がハウス栽培で葉物の洋野菜(ベビーリーフ、バジル、ルッコラ、ハーブ)を栽培している。残りは露地で根菜類を作っている。40 歳代の社長は卸売会社 F も経営⁶⁾しており、G で生産された野菜はすべてこちらの会社が買い取り、大小 300 を超えるレストランを取引先に卸売を行っている。卸売会社 F の事務所敷地では直売も行っている。

A 市の圃場は、取引先のレストランのオーナーから、実家に 10 年くらい利用していない農地（耕作放棄地）があるので使わないかと話があったのがきっかけである。ハウスの骨組みがしっかりしていたのでこれならやれると思って借りたそうだが、実際にやってみたら大変だったという。水害でハウスの工事も予定より遅れている。G の法人登記が A 市なのは、同市の助成事業を使うために A 市で法人を立ち上げる必要があったからとのことである。

従業員は、正社員 2 名（男女各 1 名）で 2 人とも福岡農大の卒業生（女性は、前節で紹介した E 氏）である。常勤パートで 60 歳代の男性が 1 名いたが、昨年末に辞めている。正社員の初任給は 18 万円（税込み）で、昇級、賞与、退職金、通勤手当以外の各種手当（住居手当、扶養手当、時間外手当）もある。勤務時間は、8 時から 17 時までだが、季節によって異なり、夏場は暑いので朝早く開始して昼休みを多めにとっているとのことである。従業員から照明をつけて夜間に収穫作業を行いたいという話があったので、来年からは試してみる予定である。休日は日・祝のほかに、隔週で 1 日休みがあり、社員二人で話し合って決めてもらっている。現在、二人とも圃場から 15 分くらいのところから通勤してもらっているが、圃場の近くに 1 戸建てを借りることになったので、それを社宅にする予定である。

雇用者については現在不足感があり、正社員 1 名、臨時職員 2 名程度が必要である。正社員については、2～3 年で 1 名をコンスタントに採用したいとしており、採用は知人の紹介と大学校への求人（説明会参加）を考えている。この前の大学校での会社説明会では 10 名程度の応募があった。新卒か中途かは問わないで一般募集も行ったが、2～3 か月で辞めてしまう者が多い。今年も 11 月くらいに農大生が欲しいと思って募集したが、既にみんな就職先が決まっていたり新たな人材を採ることができなかった。正社員として採用したい人材は、自分で考える事のできる人であり、指示待ちでは困る。今後も福岡農大の卒業生を採用していきたいと思っており、そのために、大学校への求人票の提出はもとより、機会があれば出前授業や講演等の実施、在校生のインターンシップや研修の受け入れ等を行っていききたいとしている。

また、福岡農大の卒業生には、農業の基礎的知識・技術や専門分野の深い知識・技術、精神力を期待している。農業の基礎的知識・技術に関しては、応用が利かないところがあるのと、困ったことがあるとすぐにネットで調べるのが今の学生の悪いところ。試験場や普及所に電話して聞くように言っているが、大学校の教育の中でもこの点を強化してほしいと思っている。社員として採用した現在の卒業生については、満足しており、当面は生産現場のリーダーとして活躍してもらいたい、将来的には会社幹部（経営者、管理職）となって会社を任せたいとも思っているとのことだった（現状で本人たちには、あまり欲がなさそうだが）。

なお、大学校の今後の教育のあり方に関しては、学生の農業技術面や社会人基礎力（挨拶、コミュニケーション等）のレベルアップに努めるとともに、農業法人の社員向け研修等の機会を積極的に提供してほしいとの要望があった。

（２）株式会社 H

（株）H は、農業、農村地域を活性化させることを目的に、2010 年に設立されニラの生産を開始している。その後、九州各地に農場を拡大し、現在約 27ha の農場で、事業収益のメインである野菜は主にニラ、サツマイモ、ミニトマト、ピーマン、アスパラガス等を、果樹はみかん、デコポン、ネーブルオレンジを生産するとともに、養鶏（採卵）も行っている。この養鶏を行っている農場が雇用就農者の事例として紹介した F 氏の職場である。そのほか、九州各地に直売所を 4 店舗経営している。生産部門の総売上額は約 5 億円で、そのうち養鶏は約 1 億円である。

会社は、役員が 11 名、正社員が 38 名、常勤パートが 180 名である。役員については、常勤が 8 名で、うち 3 名が本社（佐賀県）に、残り 5 名は各農場の農場長として勤務している⁽⁸⁾。非常勤の 3 名の役員は親会社からの出向者である。

法人での求人は、九州の各県農業大学校、南九州大学、東海大学（熊本キャンパス）に出している。ハローワークにも一応出しているが、あまり応募がないとのことである。農業大学校のうち大分、熊本、長崎については大学校に直接説明にも行っている。福岡農大の学生は、学校での説明会を行わなくても採用試験を受けに来てくれている。研究職は求めていないので国立大学には募集を出していない。現在、農業大学校の卒業生は正社員として 13 名程働いてもらっている。年 3 名程度を採用することとしているが、ここ数年の採用実績は、2018 年度 6 名、2017 年度 1 名、2016 年度 2 名であり、その年の実際の応募状況によって人数が変動している。2019 年度も 2 名採用する予定でいる。

会社では、1 農場に 3 名の社員（農場長、副農場長、従業員 1 名）とパート従業員という体制をとっている。4 年前から正社員は農業大学校の卒業生を中心に採用している。それまでは農業高校の新卒採用面接も行っていたが、働くことについて自身の気持ちが固まっていない者が多かったことから今では行っていない。農業大学校の卒業生を採用するに当たっての課題は、学校開催の説明会や求人受付の時期が各県の大学校でバラバラなことである。今年度の採用活動は、他の一般企業と同様に 1 か月早めて行ったが、福岡農大は学校の対応が早かったので募集できたが、そうでない大学校もあった。

（株）H での社員育成方針は、入社後に研修を実施し、2 年目、3 年目、4 年目にフォロー研修がある。そのほか社内勉強会や、一部の社員は初級・中級管理者向けの親会社のセミナーや GAP の国内セミナーへも参加している。現在、正社員として採用した従業員のキャリアは、主任、農場長、農場長代理の三つの職階しかないのも、この点を改めようと今仕組み作りを行っているところである。

農業大学校の卒業生の良い点は、農薬、農業機械の取扱いについて基礎的な知識を持っているところである。会社では、彼らを将来の農場長候補と考えているので、経営面についても大学校でしっかり教えてほしいと期待している。ICT 等のスマート農業については、大学校で勉強しておくことは悪いことではないが、学んだ技術自体がまだ実用化の段階にはないことに加え、会社の経営（収益力）がそれらの技術を活かせる段階に達していないので、すぐに役立つものではない。

6. おわりに

本章では福岡農大の養成課程（養成科）を対象に，教育カリキュラムや就農支援に対する評価や課題を，全在校生のアンケート調査結果と，大学校関係者，卒業生（親元就農者，独立自営就農者，雇用就農者），卒業生を雇用している農業法人からのヒアリング調査結果によって分析した。

福岡農大でも近年，非農家子弟や普通高校卒業者といった，農業の基礎知識を全く持っていない入校者が増加しており，学生の多様化が進んでいる。また，これら入校者の卒業後の進路希望は，自営就農ではなく雇用就農や農業関係の団体・企業への就職希望が多く，明らかにこれまでとは異なってきている。

大学校では，これら変化にいち早く対応し，カリキュラムの見直し等に積極的に取り組んでいる。それは例えば，最新の農業技術を学ぶ機会として企業による最新農機具のデモンストレーション，農業法人等でのインターンシップの単位化，近隣 JA との連携協定に基づく研修機会の確保と新規就農者に向けた環境整備等である。加えて，生徒一人一人に対するきめ細かな就農（就職）指導（研修先の紹介・相談等を含む）が，教職員の地道な努力の下で行われていた。そしてこれらの取組や努力が，全国の農業大学校の中でもトップクラスの就農率を維持し続けている要因と言えよう。

また，これらの成果は，在校生アンケートによる高い大学校評価にも現れていた。大学校の教育カリキュラムについては，卒業後の進路に役立つあるいは，実践的かつ専門的な内容であると，7 割を超える在校生から満足との評価が寄せられ，多くの学生が農業の変化に対応した教育内容が提供されていると回答していた。加えて，進路指導に対する満足度も総じて高く，特に自営就農者希望者からの評価が高かった。

さらに，大学校の教育については，既に就農している卒業生のヒアリングからも，自営就農，雇用就農といった就農形態を問わず，自分の就農に役だっているとの評価であった。中でも，農業の基礎的知識・動作が身についたことや，農業に関することを幅広く学べたこと，大型農業機械操作の資格が取得できたことのほかに，同期や先輩・後輩，教員といった，大学校の中での人間関係が築けたことが大きいといった声が複数聞かれた。実際，独立自営就農している卒業生が，大学校での人脈を生かし，自分の経営の中に農大生を積極的に雇用しているケースも見られた。

他方，卒業生を雇用している農業法人の側からは，農大生は農薬や農業機械の取扱い等，農業の基礎的な知識を持っている魅力的な人材であり，二つの法人ともに，社員として採用した現在の卒業生には満足しており，生産現場の責任者（農場長等）になってもらいたいとの期待が大きかった。また，これからも農業大学校の卒業生を採用していきたいという意向も共通しており，優秀な人材確保に向けて，大学校では農業技術面の教育に加え，農業経営面や社会人基礎力（挨拶，コミュニケーション等）のレベルアップにも更に努めてほしいとの要望があった。なお，広域化した農業法人では，各県の大学校の法人説明会

や求人受付の時期がバラバラであり、計画的な採用に支障があるといった意見も聞かれた。

このように、大学校での教育や就農支援に対する評価は総じて高く、輩出している人材に大きな期待が寄せられている福岡農大であるが、他の道府県農業大学校ともう一つ大きく異なるのが、入学金や授業料を全額免除している点である。すなわち、県がこれら費用を負担し、就農を目指す若者の経済的負担を軽減している。今日、新規就農者を育成・確保することが喫緊の課題となっている中、県としての就農対策に対する姿勢を体現するものであり、大学校の取組とともに大いに評価されよう。

注 (1) パンフレット「燃やせ情熱!! 君の夢がここにある！」(平成 30 年度福岡県農業大学校要覧) 及び同大学校ホームページ (<http://fuknodai.jp>) による、

(2) 養成課程の 2 年間で修学経費は、入寮生が約 95 万円、通学生が約 68 万円 (海外研修に参加する場合は、別途約 28 万円が必要)。

(3) 取得できる資格は、このほかに、けん引運転免許 (農耕車限定)、家畜人工授精師免許 (畜産コースのみ)、危険物取扱者 (乙種第 4 類)、毒物劇物取扱責任者 (農業用品目)、小型車両系建設機械運転業務特別教育講習、日本農業技術検定 (1 級・2 級・3 級) がある。

(4) この点については、「例えば、卒業生を研修施設に 2 年ほど受け入れて、その間に空き施設を探してそこで就業させる、あるいは、生産部会が卒業生 1, 2 名を受け入れて、その間に空きハウスを探してそこで就業させる、というような方法が取ればよいと思っている。」とのことだった。

(5) 「就農 (その他)」の中には、孫継承を希望する者が複数含まれている。

(6) ヒアリングは、卸売会社 F の事務所 (F 市) で実施した。

(7) この男性は、地主で農業経験はあまりなかった。当初は正社員で採用していたが本人の希望でパート勤務としていた。

(8) (株) H の本社でヒアリングを実施した F 部長も、元々農業とのかかわりは全くなく親会社に入社したが、人事異動で H に配属となり、3~4 年前は養鶏場の農場長として勤務していた。

[引用・参考文献]

福岡県農業大学校 (2018) 「燃やせ情熱!! 君の夢がここにある！」(平成 30 年度福岡県農業大学校要覧)

福岡県農業大学校ホームページ (<http://fuknodai.jp>)

全国農業高校協議会 (2018) 『平成 30 年度全国農業大学校等の概要』